

Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.2 February 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

2

CONTENTS

- 巻頭言
信仰を翻訳する
／井上 昭洋 1
- 文脈で読む「身上さとし」(11)
明治 21 年 5 月
／深谷 耕治 2
- 音のちから—中国古代の人と音楽 (18)
出土楽器が語る音の世界—
／中 純子 3
- ヴァチカン便り (66)
ヴァチカンの年末
／山口 英雄 4
- 天理参考館から (34)
辰年の竜骨車
／幡鎌 真理 5
- 2023 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』
に学ぶ (9)
第 5 講：165 「高う買うて」
／島田 勝巳 6
- 2023 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』
に学ぶ (9)
第 6 講：113 「子守歌」
／堀内 みどり 7
- おやさと研究所ニュース 8

2023 年度おやさと研究所 特別講座
「教学と現代」／2023 年度公開教学
講座のご案内／2024 年度公開教学
講座のご案内

巻頭言

信仰を翻訳する

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

私は天理教教会本部に籍を置いているので、毎月、神殿と教祖殿の当番に入る。いずれの当番であっても、結界内で着座して奉仕当番を務めるわけだが、奉仕中は参拝者の方々の礼拝の姿を当然のことながら目にするようになる。神殿と教祖殿とでは、参拝者の礼拝する様子は異なる。神殿では、あらゆる方角からかんろだいを拝することができ、信者は思い思いの場所に座って、座りづとめをする。教祖殿では、合殿と御用場のいずれからでも礼拝することができるが、合殿で教祖の御前にて拝するのと、御用場から拝するのでは、参拝者の心持ちに違いがあるようだ。それは拝をしている時間の長さにも表れる。御用場ではおさづけを取り次いでいる様子をしばしば目にするが、まれに座りづとめをしようとする人がいる。正面中央の大きなお社を見て思わず手を振ってしまうのかもしれない。そのような時には境内掛が駆け寄って、座りづとめは神殿でするようにと促す。

礼拝に来る人は必ずしも信者とは限らない。知り合いの信者に誘われて訪れる人や社会見学の一環で訪れる人もいる。いずれにせよ引率者は、神殿であれば「ぢば・かんろだい」の意味について解説する。この世の始まりに親神が人間を宿し込んだ地点を「ぢば」と呼び、そのぢばに親神が鎮まっていること。その地点に「かんろだい」が据えられて、礼拝の目標となっていること。さらに、「ぢば・かんろだい」を囲んで勤められる「かぐらづとめ」について紹介すれば、天理教の聖地であるぢばについての一通りの説明になるだろう。

一方、教祖殿であれば「存命の教祖」について解説することになる。教祖は明治 20 年陰暦正月二十六日に現身を隠したが、今もなお存命のまま働いていることについて説明し、教祖殿では掛の方が存命の教祖にお仕えしていることも合わせて述べるこ

になるだろう。ある時、合殿結界内で奉仕していると、未信者と思しき人を連れてきたハッピー姿の青年が教祖と教祖殿について説明している姿が目止まった。それとはなしにその説明に耳を傾けていると「教祖は存命であるということになっている」という彼の言葉が聞こえてきた。その言い回しは私の耳に妙に引っかかり、やまびこのようにこだましたのだった。

教祖が存命であることは天理教を信仰する者にとって絶対的な真理である。しかしながら、信仰者にとってのこの真理を未信者に説明する時に、未信者に分かるようにその真理を翻訳する必要がある。翻訳においては、その言語・文化を解さない相手の側に立って、相手側の視点からアプローチし、意識する必要がある。「ということになっている」という文言もそのような思いから発せられたのだろう。未信者にならなければ、この青年が確固たる信仰を持っていることは明白だ。相手の側に立って中立的かつ客観的に説明しようとして「ということになっている」という言い回しになったのだと思う。そこに他意はなかったに違いない。なにより彼自身がこの言い回しに自分の信仰を否定しているかのような居心地の悪さを感じてはいたはずだ。

「教祖は存命である」と言い切ってしまうのは、この真理の丁寧な翻訳にはならない。彼は「(私達は) 存命であると信じている」と言うべきだったのか、「存命であると教えられる」と言うべきだったのか。それとも半ば確信犯的に「教祖は存命だ」と宣言すべきだったのか。そのようなことに思いを巡らせながら、信仰者自身が「ということになっている」というレベルに近いところで教祖存命の理を捉えてしまうようなことはないか？とうつらうつらとしながら自問したのであった。